

手前味噌八犬伝

渥美清太郎

〈出典：「劇場」第2巻10月号、昭和22年10月〉

東宝から依頼を受けたのが髓^{たし}か八月七日ごろで、馬琴が二十八年かかった「八犬伝」を五時間に縮め、十六日までに脚色しろという注文。大抵の人なら断わるでしょうが、小生いとも易々と引受けたのは、ナアニ八犬伝なら古い脚本があるから大丈夫と、高を括った為なのです。ところがイザ用意にかかって見ると、豈^{あに}計らんや、という程でもないが、小生が日本戯曲全集へ収録して置いた、西沢一鳳の大坂出来の脚本は、二の替りつきだけに悪長くてとても参考にならず、義太夫本も二日つづきの代物で役に立たず、治助の脚本が演博にあった筈だと思って行って見るとこれが無し、せめて黙阿弥の荒芽山だけもと河竹氏に訊いて見ると、これも震災以後欠本のままであり、たしか上野の図書館と思い出して行くと、満員で入れずという次第で、企画ことごとく挫折し、遂に全部新らしく脚色しなければならなかったのには驚きましたが、本当に昼夜兼行で戦い通し、どうにか十八日には渡すことが出来て、長い息をついた訳でした。

八犬伝の名だけにはポスターバリューもあるでしょうが、今さらこの古典を利用したところで新しい意図を盛り得ないのは東宝だって勿論知り切った話です。私もまさかそんなことは考えません。引受けたのは、これを機会に、退蔵されている演出物資に日の目を見せ、虫干しかたがた^{かんきやく}看客に、こんなものもあるのだということを知ってもらい、同時に若手の人たちの芸を磨く種にしたいと思ったからで、サンプルの陳列に過ぎないじゃアないかという評もありましたが、私は本当にサンプルを並べるだけの気持ちでやったのです。セリフが粗雑だという評もあったが、それは私も随分気をつけたところで、只イザ稽古になって驚いたのは、若い人たちが脚本通りキチンと覚えてくれるのに引きかえ、年配の人は全部意識で七五調も何ありません。セリフを音楽として扱ってくれないのです。粗雑というのはそこから来た感じでしょう。

序曲として講釈を使い、序幕以前の筋をしゃべらすというのは東宝案で、小生も賛成してやってみましたが、講談の原稿を書くのは初めてだけに、ちょいとまごつきました。その講釈師になる鯉三郎は原作者に因みある馬琴を師匠として大いに凝ってくれました。その前へ長唄「八犬伝」のバカイの合方を使ったのは小生の味噌なのですが、今の人には解りませぬまい。

初めに宮場を使ったのは、治助の脚本にあるのと、昔の脚本の形式を見せ、水を汲みにゆくにきまっていた茶屋娘を出したかった為です。爰^{こゝ}で合方が宮神楽、鳴物が大拍手というのも味噌の一つで、彦三郎に幕を切らせたのは、この人の貫禄を見たかった為なのです。

藁六の内では独吟の色模様を見せ、刀の摺替えの筋を解らせるだけで、この摺替えを原作では、神宮川の船を使って手をかけてあり、新七の脚色では、正直にその通りやっていますが、治助の脚本では爰でアッサリ手際よく見せているのでそれに従ったのです。といっても

脚本はありません。私が子供の時、三崎座でやった舞台を覚えていたのでその通りにしました。そのとき左母次郎をやった鯉昇という女役者が、幕切れに雫がかけられ、顔を押しやる仕草の巧さは、今だに目に残っています。

婚礼の場は滑稽中心で、これも三崎座で覚えていたのを利用しましたが、タワシや蠟燭は原作そのままです。おかしみのだんまりに車引を利用して見たが、一向手ごたえがなかったにはガッカリしました。円塚山は、一つ鉦を使った女の殺しと、時代だんまりを見せるのが主で、本当はそれも道節と額蔵だけ、幕切れは道節が杉の梢へ宙吊りになるのが型ですが、俳優を活かしたい為に小文吾と毛野を加えました。これは浜路から早拵えで替る所を見せたかったからで、幕外の六方も、テクニックの一つとして付けたのです。ところが爰には花道がなく、そのため幕外の横六方という事になりましたが、それでも無いよりは増しのつもりでやってもらいました。

遊我の館は、金襖の御殿場と、花いくさの型を見せる為に付けたので、花いくさは治助の脚本にありますが、これ以外は為朝の狂言だけなので、こんな時にやって置かないと忘れられてしまうと思って入れました。芳流閣の大薩摩は、続歌舞伎年代記に出ている、江戸初演の時のをそのまま使ったのです。これが行徳の入江へドンデン返しになるのも江戸初演の型で、一つ爰は大道具を奮発してもらおうと思いましたが、そんな事をしたのでは初日に間に合わないと云われ、御覧の通り極めて簡単な居所替りですませました。行徳では時代から世話へ、ガラリと変わった気分を出すつもりが、そんな加減で思うようにゆきませんでした。爰ではおなまに世話だんまりを見せます。

次の古那屋は原作でも性根場ですが、房八が切られてモドリとなり、その血汐で病気が癒り、お縫の自殺などという筋は、どうしても気がさして出来なかったのが、只の角力の達引の場にしてしまい、ちょっとした身売りの形と、角力と傘の立廻りを見せることにしました。千両幟の明石志賀之助を搦きませたのですが、「こりゃコレ男の生面を」なども、実は書きながらテレました。併し考えてみるとテレるのは自分だけで、大部分の看客は知らないのだからと思直して、勇敢に昔通りやりました。渡りゼリフを多くしたのも、八犬伝を盛んに脚色した、幕末の脚本形式に拠ったのです。

ところで荒芽山は、昔から大ダレの場ときまってる居り、明治四十何年かに歌舞伎座で吉右衛門がやった時も、二時間近くかかったのを覚えているので、いっそ玉返しの庵室で猫退治を見せ、軽業師を雇ってケレンをやらせようかと思いましたが、俳優諸君も、あんまり他愛のない筋もどうだろうという説だったので、荒芽山にきめました。それも初めは原作通り、道節の刀売から田文の森も出すつもりでいたのですが、書き出してみると、とても時間が足りないと感じ出したので、荒芽山一ぱいにしてしまいました。

この場は原作でも親子、兄弟、夫婦の情がよく描けて居り、死んだと思った人が生きていて、生きている筈の人が死んでいるという大技巧もあり、戦死者の遺家族の悲しみも出せると思ってやり出しましたが、筋に追われて満足に果せませんでした。爰は当然チョボを使う愁嘆場形式で、中へ物語の型を見せるのが主ですが、義太夫の人が旅へ行ってしまういな

いのと、少しはダレるのが效われようかと思って常磐津に見ました。明治二十何年かに団十郎が道節と力二郎をやった時は、幽霊の出に原作にある馬士唄を和楓が唄ってひどくよかったと鶯亭金升氏に聞いたので、早速使おうと思いましたが、常磐津はもう出来てしまったし、肝心の花道がないので引立たないから諦めました。

大詰の対牛楼も、時間の関係で縮刷版に終り、梅幸には気の毒でした。切を定包の詰めより形式にしたのは、幕切れの花やかさと、まず今日はこれぎりの形を見せたかったからです。毛野の踊は「浅妻」のつもりでしたが、勘十郎の説によって「舞扇」にしました。

少し手前味噌が多すぎて申し訳がありません。幸い成績がいいのと、この一座の稽古ぶりに接して、その熱心さを再認識したので大喜びです。

(昭和 22 年 9 月帝国劇場所演)